小学校特別支援学級における個別の指導計画に基づいた自立活動の指導の充実
～特別支援学級担当者同士の協働を意識して～

下関市立川中西小学校
教諭　波多野　雄一

1　主題設定の理由

本県では特別支援学級が年々増加している。特別支援学級を担当する教員も、経験の浅い教員や若手教員など多様である。小学校においても障害の重度化・多様化、関係機関との適切な連携など、対応する教育的ニーズが多様になってきている。そのため、担当する教員の専門性の向上が求められている。

特別支援学級担任の専門性とは何かと考えたときに、支援学級のみにある指導領域である「自立活動の充実」が挙げられよう。「自立活動」とは、「個々の障害に起因する困難を改善・克服するための指導」である。障害がある児童を指導するに当たって、要となる指導領域である。また特別支援学級には、個別の教育支援計画、個別の指導計画といった、作成しなければならない書類がある。担任をするとその書類の量に負担に感じる教員がいるのも現状として見られる。

筆者が勤務する学校は、特別支援学級６学級（知的障害１、自閉症・情緒障害学級３、難聴１、病弱・身体虚弱１）が設置されている。担任する６名の教員も年齢層や経験、得意分野がそれぞれある。筆者は６学級の主任として、今年度は各教員の持ち味を生かしながら、専門性の向上や働き方改革に取り組みたいと考え、研究主題を設定した。

2　取組の状況

（１）　個別の指導計画の様式の作成

小学校学習指導要領解説によれば、「個別の指導計画の作成の手順や様式は，それぞれの学校が児童の障害の状態、発達や経験の程度、興味・関心、生活や学習環境などの実態を的確に把握し、自立活動の指導の効果が最もあがるように考えるべきものである。」とある。このため、山口県教育委員会が示している個別の指導計画様式例を参考に、表計算ソフトを使って、様式を作成した。作成に当たっては、特別支援学級の経験の浅い教員の意見や疑問も大切にしながら、校内で検討して運用することとした。

年間指導目標や学期ごとの目標及び評価に加えて、図にあるように、年度末の引継に利用するためのシートを作成している。項目は、①検定教科書を使っているか②進度など学習の習得の状況③引継内容（指導をするにあたって特に配慮が必要な点、学習の進め方）④ノート（使用の仕方、マス目の大きさなどの配慮）⑤評価テスト（使用の状況、ルビの必要性）⑥主な学習場所（支援学級、通常の学級、併用）⑦交流時の対応（自立・必要に応じて支援員・常時支援員）である。これまでは、個別の指導計画とは別に書類を作成していたが、次年度担当者が替わったときにすぐに必要な情報は何かを担当者同士が話し合い、集約しておくこととした。

個別の指導計画

学年		年	氏名	

	教科書	進度	学年	引継内容	ノート	テスト	主な学習場所	交流時の対応
国語	○	△	2年	・プリントで学習を進めた ・テストは２年用		通常	支	要支
社会	○	○	3年			ルビ付き	支	支不要
音楽								

図１　引継用シート

（２） 年間の作成スケジュール

本校では、作成のスケジュールを以下の通りにして取り組んでいる。

４月～５月	個別の教育支援計画目標、評価の確認　保護者懇談 年間指導目標、１学期の目標、手立ての設定
７月	１学期の目標に対する評価→通知表へ反映 ２学期の目標の設定 通知表及び個別の教育支援計画をもとにして保護者懇談
１２月	２学期の目標に対する評価→通知表へ反映 ３学期の目標に対する評価 通知表及び個別の教育支援計画をもとにして保護者懇談
１月～２月	年間評価について可能なものから記述する
２月～３月	３学期の目標に対する評価 個別の教育支援計画一年間の評価および次年度の重点目標案の作成 個別の教育支援計画に関する保護者懇談

なお、学期末保護者懇談会を見据えて、特別支援教育コーディネーター（以下特支 Co とする。）が、通常の学級担任に対しても個別の教育支援計画に関する話題を通知表の説明と併せて話題にするよう呼びかけを行い、必要に応じて懇談の進め方の支援や、特支 Co による個別の教育相談の設定など、全校的な体制構築に務めている。

（３） 個別の指導計画作成にあたっての担当者の声

個別の指導計画作成にあたり、支援学級担任同士で話題になった点は、以下のとおりである。

【目標】

- 個別の目標を立てる必要があるか。（通常の学級で同じ内容を学ぶ児童）
- すべての教科で個別の目標を立てる必要があるか。（通常の学級で同じ内容を学ぶ児童）

【手立て】

- どこまで手立てとして記入する必要があるか。

【評価】

- 課題点をどのように書いたらよいか。

上記の疑問点について、山口県教育委員会が作成した冊子を参考に、対応を共通理解した。通常の学級で同じ内容を学ぶ予定のある児童については、教科の指導目標については「通常の学級に準ずる」ということにした。ただ、学び方、特に育てたい態度面で個別の目標がある場合には、めざす姿を個別に記述するようにした。手立てについては、キーワード「人・もの・場」を合い言葉に、教師や大人が言葉かけなどの工夫をすること、個別支援のための道具を使うこと、場の工夫をすることについてできるだけ詳しく書くようにした。

（４） 学年経営について

学年のはじめに、同学年会を行い、以下の学年の経営方針を共通理解するようにしている。特別支援学級児童が交流学級の一員として生活できるように、特別支援学級担任も全校の教員の相談役になるように努めるようにしている。児童理解については、複数で行うことについては、毎日の放課後職員室に戻ってから、各学級の児童の様子

の情報交換を行うようにしている。その中で、自立活動の時間に取り扱った方がよい内容、方法を話し合ったり、指導に参考となる本や教材を紹介したりと、指導力の向上に向けての取組を行っている。

①　特別支援学級という小さな集団で生活するため、学級目標など行動や判断の柱になるものを明確にする。 ②　障害に応じた指導や支援を行うために、自立活動の時間を設けて指導を行う。 ③　子供だけの力で何ができるようになったかを大切にする。 ④　児童理解、保護者対応は、複数で行う。 ⑤　交流学級担任との連携を密にする。 ⑥　各学年の特別な配慮を要する児童への対応方法の相談に乗り、一緒に考える。

（３）自立活動の授業実践

①　不安に対する対応

持久走大会に向けて、走ることの苦手な児童に対しては、持久走大会に参加することをねらい、日々のウォーキングとジョギングから始めた。体を動かすことへの抵抗感を減らした。持久走大会が近づいてくると、学年での試走に参加することになるが、「完走できないかもしれない。」という本人の不安が出てきた。そこで、学年での試走も、距離や時間を区切って、「（３分の１ほどの距離）を走ってみよう」「〇分間走ってみよう」という個別の目標を提示して、参加を促した。

本番近くになり、校外の周回コースの下見に出かけた。本校近辺は、アップダウンがあるため、苦しいところ、力を抜いて楽に走るところなど、コースだけでなく、そのときに考えるであろうことも予想して話しながら下見をした。途中でリタイアすることを想定し、本人の意向を聞くことにした。「リタイヤしたところを人に見られることは恥ずかしい。」という思いがあるため、周回コースの中で学校から離れたところではなく、学校に戻ってきた時点で申し出るようにと、約束した。

教室では、個別に持久走大会についての不安を話し合った。関係機関の助言もあり，ホワイトボードなどで図式化することで、直面している課題と対応策を見える化できるようにした。

当日は、途中リタイアとなったが、リハーサル通りに対応することができた。

②　望ましい行動を増やすための実践

学校目標や学級目標の達成に向けて、望ましい行動を具体的に決めて、振り返りをする取組を続けている。まずは、めざす姿や行動を、学級活動や自立活動の時間に話し合い、できるだけ具体的に決めるようにしている。例えば、朝の支度のルーティーンができない児童には、登校してからの行動を確認し、「８：１５分に着席して待つ」ことを示すことで、できるようになることが増えている。小学生として当たり前の行動のプロセスを考えて、具体的に示すことで、教師がターゲット行動に着目していることが子供にも伝わる。一日の終わりに行動の振り返りをしてポイント制にして成長が感じられるようにしている。少しずつではあるが朝のスタートが円滑にできるようになってきている。

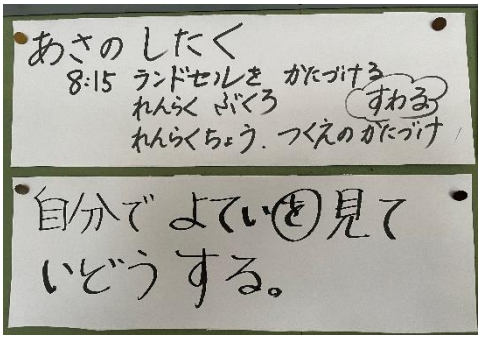

図２　ターゲットとなる行動を示した教室掲示

なお、このたびの研究助成を受けて参加した学会でも、「ポジティブ行動支援」として、学校全体で取り組んでいるという報告があり、特別支援学級内だけでなく、学校全体で望ましい行動を増やすために参考になるものである。

③　大人との関係性に課題の見られる子が自信をもって生活するための実践

①の実践に関連しているが、様々な事情で大人の指示や助言を素直に聞いて行動することが苦手な児童がいる。「嫌だ」「しない」「無理」「（無言・無反応）」という反応を示すことがある。

そこで、ワーキングメモリの低さ、注意散漫な点など子供一人一人の聞く力を伸ばす視点と、大人の話を聞く気持ちにさせるための関係性や信頼を深める視点から改善を試みることにした。

一点目の聞く力の改善については、一定時間体を静止させる練習から始め、教師が話した短文の内容を答える活動、短い文の最初の言葉と覚えながらキーワードが出てきたら手をたたく活動などに取り組んだ。

二点目の関係性の改善については、個別の教育相談の時間を設けて、一対一で家庭の状況を確認したり、学校生活でもっと改善したいことを子供自身が語る場面を設定したりした。学習中にイライラして落ち着かないときには、教師とともに散歩をしたりキャッチボールをしたりしながら、気持ちを切り替えて「行動は自分で変えるしかない」というメッセージを送り続けるようにした。

上記の取組により、劇的な行動の改善とまではいかなが、気持ちの波がありながらも、大きな失敗を経験せずに、本来の学習活動に取り組む時間が増えてきている。今後も、子供自身の能力的側面だけでなく、彼らが置かれている家庭の状況、これまで自信を失いながら生活せざるを得なかった過去も考慮にいれながら関わりたい。

３　おわりに

教員の大量退職の時代を迎え、特別支援教育の推進に大きな役割を果たしてくださった多くの尊敬している先輩方が勇退の時期を迎えている。それぞれの先輩方は昼夜休日を問わず、自己研鑽を積み重ねてこられてきたが、働き方改革が強調される現代では同様の取組は難しいだろう。そこで、学校現場でのＯＪＴが重要になってくると考えた。

自立活動の目標は、子供一人一人、それぞれ異なる。１学級８人という定員で異学年の児童で構成される特別支援学級では、取り扱うことのできる自立活動の内容も限られる。教科の指導に関しても３から４の学年で構成される学級では実習を伴う活動、音楽科、外国語科などは日課編成が困難である。

困難な状況なので何もしないというのではなく、限られた条件の中で、学校が主体的に考え、指導の充実を図っていかなくてはならない。なお、本稿の自立活動の実践内容は、個人が特定されないため、学年・障害の状態・個別の目標などわかりにくいようにしている。自立活動の指導内容を考えるに当たっては、これらの個人の実態から出発することが必要であることは言うまでもない。

担当者一人の知恵では、限りがある。担当者同士が、児童の実態をもとに自立活動の充実に向けて互いに切磋琢磨できる学年経営を進めていきたい。

４　引用・参考文献

・ 半田ら（2023）スクールワイドＰＢＳの実装の障壁を乗り越える（1）　第１層支援の「探索段階」と「導入段階」における障壁、一般財団法人日本ＬＤ学会第 32 回大会（広島）論文集, pp. 85-86.

・ 宮口幸治（2008）やさしいコグトレ　認知機能強化トレーニング, 三輪書店

・ 文部科学省(2017)　小学校学習指導要領解説―総則編―

・ 文部科学省（2017）特別支援学校学習指導要領（幼稚部・小学部・中学部）解説-自立活動編-

・ 上嶋恵（2008）1 分間集中トレーニング　教室でできる特別支援教育, 学陽書房
・ 山口県教育委員会　山口県特別支援教育資料
・ 山口県教育委員会（2009）特別支援教育における「個別の指導計画」作成のために